

学長 原稿後日談

前記の原稿をいただいたとき、原稿を読むにつれ、学長にいろんなことを聞いてみたいと思ったのが、この原稿後日談のインタビューにつながりました。

本学が、学生に語学力をつけてもらおうとカリキュラムを工夫し、英語村の施設のように、英語を常に感じられるような環境づくり、また、図書館では、多読図書などの資料を充実させるなど、学内で英語を学ぶ環境が整うなか、培った語学力をためすには、またいっそう磨くには、留学は、おおいに身近に感じられる話題の一つです。

今回図書館の話題はさておき、留学関係のお話を中心にインタビューさせていただきました。

課員：図書館館報「香散見草」に原稿をいただきありがとうございます。また、本日は、原稿後日談として、インタビューをお引受けいただきありがとうございます。山のようにお聞きしたいことがあるのですが、今日は図書館の話題もさることながら、学生にも身近に感じられる留学関係のお話を中心に伺いしたいと思います。

課員：先生は、中学校卒業後、旧制外事専門学校（現在の神戸外国語大学）へ進学されていますが、何故、高等学校ではなく、外事専門学校へ進学されたのですか？

学長：旧制の中学校（現在の兵庫県立明石高校）を卒業したのは昭和22年です。当時は終戦直後の混乱期で、食料不足は深刻でしたし、列車も食料の買出しなどで超満員でした。僕も窓から乗り降りしたことがありますよ。そんな時、自宅から通える神戸に公立の外専が新

設されたというので、そこに行くことにしたのです。

当時、3年制の旧制高校を出て、3年制の旧制大学へ進むのがオーソドックスなコースでしたが、先輩から専門学校からも大学受験ができると聞いていましたからね。僕が目指していた大学は入試に外国語2科目を課していましたので、外専は好都合でしたよ。

課員：戦後の混乱期、外事専門学校で外国語を学ばれたんですね？

学長：僕はそこでは英語科に入りました。当時海外に行きたいという気持ちも強かったから、何らかの理由で大学へ行けなかったも、外国貿易をやっている商社へ就職することも可能でしょう。普通高等教育機関である高等学校では、卒業しても就職は難しいでしょうからね。

課員：失礼ですが、日本人は語学が苦手というのが頭にあるのですが、英語に抵抗感はなかったですか？そもそも英語との出会いは？

学長：余り抵抗感を感じなかったね。中学に入ってすぐ、神戸のアメリカ系ミッションスクールを出て商社に勤めている従姉に英語を教えてもらったものだから、中学の先生に習っている皆と僕とでは、発音が違い当惑したものです。もっとも、段々と同じになっていきましたがね(笑)。

課員：初めて教えてもらった先生がよかったということですか？それで英語が好きになった？

学長：学校の先生から教わる英語は典型的な

学校英語で、退屈でしたけど、従姉に家で個人的に習っていたので余裕をもって授業にのぞめましたね。そんなことで、英語は得意科目の一つになったんだと思います。

課員：外専を出て、先生は京都大学法学部に進まれましたね。

学長：そうです。僕は、昭和25年京都大学法学部に旧制の最後の学生として入学しました。学部長は、昭和8年の滝川事件の張本人である滝川幸辰先生でした。教授陣の中には、非常勤となっておられたが、滝川事件の時総辞職された佐々木惣一先生、末川博先生などそうそうたる学者がおられ、大きな刺激を受けたものです。

課員：先生は沢山の本を読まれたでしょうね。大学時代はどのように？

学長：京都では知人の紹介で、左京区に下宿することになりました。早速区役所に行って住民登録をし、米の配給を受けるための米穀通帳をもらったものです。この頃の生活パターンと言うと、学生食堂で食事をした後、吉田山を越え、下宿に帰るのですが、冬の寒い日など、帰るとすぐに、コンロで炭火をおこし、それを火鉢に入れて暖をとったものです。下宿が火をおこすことを認めてくれないところもあり、そんなところに住んでいる連中は、万年床にもぐり込んで暖をとっていましたね。僕も火をおこすのが面倒な時に、布団に入って本を読んだり、字を書いたりしたものです。京都の冬は底冷えがして寒かったからね。そんな頃に、親しい友達から中央図書館が夜の閉館9時まで石炭暖房を炊いていると聞き、それ以降は毎晩9時まで図書館で過ごすことになりました。

この頃は、暖房のよくきいた図書館で法律書だけではなく、小説や歴史書など色んな本を読み漁ったものです。楽しかったですね。

図書館へはよく通いました。覚えているのは、後年ハーバードで再会を果たし、親しくなったアメリカ人のジョン・クレグが何か難しい和書を一生懸命読んで勉強をしていたことです。彼は長州の研究で学位をとった優秀な日本史の専門家です。とにかく図書館では、熱心に勉強をしている人を見て知的刺激を受けましたね。

課員：さて、留学のことですが、1960年初めに、ハーバード大学へ1年留学されたその当時は、先生は広島大学に奉職されていましたね。ハーバード大学への留学制度、招聘計画とは、どのようなものだったのですか？

学長：日本から毎年人文社会系の若手研究者を5,6人招いてくれたんです。そのために日本の30の大学に候補者の推薦を依頼していました。むこうは、推薦状を重視します。僕の推薦状は、学問的に非常に厳しい人で広島大学学長を務めていた森戸辰男先生が書いてくれたんです。僕は、そのお陰で、留学することができたと思っています。

課員：ハーバード大学への留学が初めての海外ですか？

学長：そのとおりです。羽田から日航機に乗ってハワイのホノルルへ飛び、そこからサンフランシスコに向いました。それより前に渡米した人は、日本郵船の氷川丸などの船で行くか、空路ならアメリカ領のウェーキ島経由でホノルル、ついでサンフランシスコへと飛んでいました。僕の乗った飛行機はダグラス

DC6Bという新型機でしたから、それまでのDC4より型も大きくなり、速くなっていました。

課員：留学された頃は、海外渡航規制もあって、海外へいけるのは、公用かビジネスに限られていて、持ち出す外貨も決められていたのでは？

学長：持ち出せる外貨は200ドルでした。1ドルが360円の時代で、安いホテルなら4、5ドルで泊まりましたからね。僕は知人の紹介で、ホノルルでは3ドルでYMCAに泊まりました。空港の到着ロビーで、「Mr. HATA」と書いた紙を持った航空会社の社員が迎えてくれました。ハーバード大学から僕が到着したら100ドルを渡してくれるよう頼まれていたとのことでした。その金で、途中あちこち旅行しながらボストンまで来るようにというハーバード大学の粋な計らいです。僕は、持ち出しの200ドルと併せて300ドル持っていますから、生まれて初めてゆったりした気分になりましたね(笑)。

お陰で、途中、あちこちに立ち寄ることができました。最初に訪れたサンフランシスコでは、終戦直後の神戸で知り合った元進駐軍兵士（帰国後、スタンフォード大医学部に進み、医師になったばかり）が1週間休暇を取り、自宅に泊めてくれたばかりか、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレイ校、地方裁判所から葬儀屋に至るまで行きたい場所に案内してくれました。それから、有名なフィッシュメンズ・ワーフ、チャイナタウンなどで食事をしたり、ベイ・エリアの観光地へドライブするなど大いに楽しませてくれました。

課員：英語はどうでした？初めての海外で、

外国人相手の会話は？

学長：当時学校で習った英語では、実戦ではあまり役に立ちませんでしたよ。僕はいずれも短期間ですが、進駐軍で通訳なんかのアルバイトもして、多少実地で勉強していましたので、アメリカ人を相手にしてもあまり抵抗感はなかったですね。

課員：語学って、使わないと能力が落ちてしまいますよね。実践的な訓練で、英語はOKということですね(笑)。
ボストンまでは一人旅？

学長：もちろん一人ですよ。

課員：はじめての海外旅行、当時まだアメリカでは、日本人にもそうそう会わなかったでしょう。勇気いりませんでした？ドキドキしませんでした？

学長：なんとかあったなあ。

課員：なんとかあった(笑)。

学長：ホノルルでは、商社で働いている友人の奥さんの弟さんが商社の駐在員をしていて、この人が車であちこちへと連れて行ってくれましたし、サンフランシスコでも、先刻お話ししたように、神戸で知り合った元GIの医師が1週間の休暇をとって付きりで案内してくれるなど結構づくめでした。それから、ミシガン州アンナーバーのミシガン大学に滞在している神戸大の先生を訪ね、そのあと、ボストンへ向ったわけです。

課員：頂いた原稿の中に、旅行に出かけていて、本を返すのが遅れ制裁金を取られたと書かれていますが、アメリカではよく旅行をされたのですか？

学長：ああ、あの時は、南部地方へ行ったんです。その10年前に、それまでアメリカ南部で長年続いていた人種隔離（シグリゲーション）政策が憲法に違反するという最高裁の判決が出ていたんですが、それがどうなっているかに関心がありましたからね。グレイハウンドバスを利用して、バージニア州リッチモンドから、ジョージア州アトランタ、アラバマ州モンゴメリー、ミシシッピ州メリディアン、ルイジアナ州ニュー・オーリンズなど深南部の主要都市などを訪ね歩きました。

ほかに、南西部のテキサス州ダラスやヒューストンへも行きました。また、ニューヨーク、シカゴ、ワシントンD.C.へも学会などのついでに行きましたよ。単身でしたので気軽に行けましたし、旅費なども、ハーバード大学や、ニューヨークのジャパン・ソサイアティー、アジア財団などが気前よく出してくれました。いい時代でしたね。

課員：南部へは調査で行かれたんですか？原稿にもありますが、南北戦争時の立憲政治について調べようと思っていたと書いておられますが？

学長：調査というより、行けば雰囲気をつかめると思ってね。それに、「風と共に去りぬ」などで有名なアトランタとか、ジャズの本場のニューオーリンズなどもかねて行きたいと思っていた町でした。

課員：「百聞は一見にしかず」ですか？

学長：そのとおりです。聞くよりも見て経験するほうが確かだと思いますよ。たとえば、シグリゲーションにしても、当時は、ミシシッピなどではまだ病棟に「白人専用」などという表示が残っていたし、公共交通機関のバスの座席も

白人と黒人の仕切りこそなくなっていたが、僕の見ただけではほとんど例外なく、白人はいぜんとして前部に、黒人は後部に座っていましたね。僕などが乗り込むと、白人の乗客も黒人の乗客もいっせいに僕が何処に座るかを見るんです。バツが悪かったですね。けっきょく、いつも真ん中が空いているので、そこに座っていましたがね(笑)。

課員：ところで、何日くらい本の返却が遅れたんですか？1ドル360円の時代に制裁金2ドルとはきついですよね。一寸調べてみたのですが、この当時、日本ではラーメン1杯50円、キャラメル1箱が20円でした。そんな時代の2ドルですからね。

学長：まあ仕方がないですね。遅れたのは1週間ぐらいだったと思います。いつもニコニコしていて、穏やかで物分りのよさそうな老職員でしたが、その時は顔色も変えず、ただガンとして負けてくれなかったなあ(笑)。

課員：同じく、原稿の中で、先生は、職務に忠実な老職員にむしろ敬意すら感じるようになったと書いておられますが、これは？

学長：書庫に自由に出入りし、本棚から好きな本を勝手に取ってきて、何日間か自分のキャレルに置いて読めるわけでしょう。自由にやらせる代わりに、ルール違反には厳しいというようなことがだんだんと分かってきたんですね。そのお爺さん、その後も穏やかで、態度は変わらなかった。会ったら、いつものように「Good Morning」と言っていました(笑)。そういう人だったんですよ。

課員：留学時代、日常生活はホームステイで

すか？

学長：いやいや、大学のすぐ近くの下宿屋で部屋を借りていました。その当時の相場は、キッチンがシェア（共同利用）で、1部屋月35ドルから50ドルくらいでしたが、僕は、72ドルの部屋を借りたんです。

課員：72ドルですか？

学長：ダイニング・キッチンが付いていましたからね。夫婦でも住めたんです。单身者には、一寸贅沢だと思ったんですが、結果的には快適でよかったと思います。

その代わり、人がよく来ましたよ。特に金曜日の夜になると、必ず誰かがやってくるんです。僕は日本食派でしてね。金曜日には、ケンブリッジに一つしかない「リーガル」という魚屋に出かけ、マグロのトロを2ポンド買って来るということを知っていましたからね(笑)。あの頃のアメリカではマグロもビックリするほど安かったんですよ。

課員：8月に旅行しながら、9月早々ハーバードに着き、留学の最後の3ヶ月はヨーロッパ旅行。その間ハーバードで勉強されたんですよね。

学長：予め大学に提出してある研究計画に従って研究を進めていくのですが、それとは別に法科大学院（ロースクール）の授業にも出席しました。ロースクールでは、ケース・メソッドとか、ソクラテック・メソッドといわれる双方向、多方向の授業、分かり易く言うと、対話調、討論形式の授業が行われていて、たいへん新鮮な印象を受けましたね。

それと、向こうの授業でもう一つたいへんだったのは、予習です。ケース・ブックという分厚い教科書を予め読ん

でいかないといけないんです。授業の時に次回は何頁から何頁まで読んでこいと言われるんです。先生は、学生がそれを読んできているという前提で、Mr.Smithとか、Mr.Jonesという具合に無作為に当てていくんです。教壇の先生の前には、シーティング・チャート（座席表）があるので、先生は、どこに誰が座っているのかが分かるんです。

そんなこととは露知らず、最初の授業の時、僕は一番前の席に陣取っていたんです。そしたら、暫くして、アメリカ人の学生がやって来て、「そこは僕の席だよ。どいてくれ」と言う。僕は馬鹿にされていると思って、つい突っ張ってね。「いや僕が先に来た」と頑張っていたところ、隣に座っていたジェントルマン風の学生が、「貴方は、事務所で席の予約をしていますか」と言ってくれたんで、やっと事情が分かり、「Im sorry」と謝った。早速事務所に飛んでいったところ、もう後ろの席しか空いてなかったね。

先生の目の前には、このシーティング・チャートがあるので、読んできかなかった学生の名前はちゃんと分かるようになっていたのです。感心しましたね。

それにしても、アメリカの学生はよく発言しますね。授業の時でも、よく手を挙げていました。高い授業料を払っているのに、元を取らなきゃ損だという消費者意識もあるでしょうが、もともと彼らは議論好きなんです。よく質問をしていましたよ。

課員：最後に、ハーバードのお金で、ヨーロッパへ行かれたんですね。

学長：有難いことに、スポンサーのハーバード・エンチン・インスティテュートが、3ヶ月間ヨーロッパに行ってもよいと

言ってくれたんです。ヨーロッパ文明とアメリカ文明とを比較して来いというわけですね。当時のアメリカは自信を持っていたんでしょうね。

僕は、アメリカとカナダでしか発行されていないユーレイル・パス（Eurail Pass）という1等車が無料で乗れるパスをもって、ルクセンブルグとフィンランド以外の全自由ヨーロッパを見て廻りました。

課員：すごいですね。ビックリですね。それにしても、ハーバードはお金を持っているのですね。

学長：ハーバードは金持ちですよ。数年前のデータによると、ハーバードは日本の金にして3兆2千億円の基本財産をもっていて、それを運用して4千億円の利益をあげたということですからすごいもんです。その運用益を使って、海外から優秀な研究者や学生を呼ぶんですよ。

こうして集められた世界の知能が、またすばらしい研究成果を挙げ、それがまた莫大な外部資金を集めてくれるわけです。

課員：それでは、最後にお伺いしますが、留学生活で楽しかったこと、一番印象に残ったことはどんなことでしょうか。

学長：そりゃあ、楽しいこと、しんどいこと色々ありましたけど、僕は本来楽天的ですので、しんどいことはすべて忘れてましたね。大学からは、毎月300ドルもらっていたので、豊かではないが、結構余裕はありました。僕の住んでいたケンブリッジの町は、大学街で、治安はよいし、清潔な街でしたね。交通の便もよかったです。家の近くのハーバード・スクエアからは地下鉄で20分くらいで

ボストンのダウントウンのワシントン・ストリートまで行けましたから、車をもたなくても、あまり不自由は感じなかった。それに、遠出したい時には、誰かがピックアップして、連れて行ってくれたしね。住居にしても、広いダイニング・キッチンがあるから、日本食を食べたい時には、遠慮なしにご飯を炊いたり、魚を焼いたりでき、快適だったと思います。そのほか、沢山の日本人やアメリカ人の友人、知人ができたことは、何よりの宝物でしたね。

課員：1年間留学するのに200ドルしか持ち出せない外貨規制の厳しい時代に、毎月300ドルももらっていたんですからラッキーでしたよね。72ドルの部屋代も払えますよね(笑)。日本にいるより快適だったようです。海外渡航の難しかった時の海外留学、必死の思いで行かれたのかなと思ってたんですけど(笑)。

課員：一番印象に残っていることは？

学長：色々なことが印象に残っていますが、大学生活について言えば、対話調の授業方法であるソクラティック・メソッドでしょう。今では日本のロースクールでも採用されるようになりましたが、当時としては初めての経験で、大きなインパクトを受けました。日本では、教壇から一方的に講義をし、学生が理解しようがしまいがお構いなしという先生が多かったですからね(笑)。

もう一つ印象に残っているのは、ハーバード・ロースクールの研究室のドアが常時開放されていたことです。ある冬の寒い日に教授室に入っていったところ、先生は上着を脱いでタイプに向っていました。廊下もセントラル・ヒーティングで暖房してあるから、ドアも開けておけるのだなあと思いつつ、

そのことを教授に話したところ、「ドアが開けてあるのは、学生が何時でも入ってこられるようにするためです」とのことでした。それは大学の方針でもあったようです。

最後に、これは印象というより、思い出ということになりますが、週末などにアメリカの人たちが家に招いてくれ、色々なところへドライブなどに連れて行ってくれたことです。ボストンやボストン周辺には、コンコードやレキシントンのような独立戦争の戦跡や、エマソン、ホーソン、ソローなど、19世紀のニューイングランドで活躍した作家や詩人ゆかりの土地や家、遺跡も沢山ありましたから、本当に楽しかったですね。これは、いくら歳をとっても忘れられない楽しい思い出です。

課員：日本にいる時よりも恵まれた環境で勉強できた1年ということですね。

学長：そのとおりです。僕はその後、何回か在外研究や講義に海外に出かけていますが、この1年は最も充実した1年だったと思います。ただ、日本に生後6ヶ月と1年7ヶ月の年子を残しての渡米でしたから、妻には苦勞をかけたと思いますけどね。

課員：留学した後、何か変わりましたか？

学長：さあね。まあ敢えて言えば、視野が少し広がったかなあ。

課員：日本に帰ってこられて、これは留学時代に培ったものと思われるようなことはありますか？

学長：それはありますね。日本の法学、特に憲法学は、戦後アメリカ法の強い影響を受けていますが、アメリカの歴史や

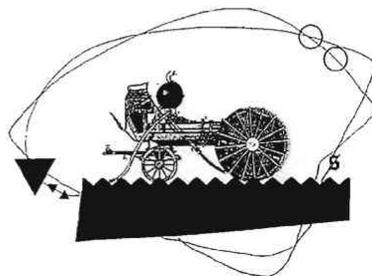
社会、アメリカ人の考え方を勉強したことで、その理解がおおいに深まったと思いますよ。それに、日本の法律論文は、ドイツ法学の影響で、無駄なことはできるだけ殺いであるため、一寸無味乾燥ですが、アメリカ人は、多少ドラマチックというか、物語り的な要素を加えています。僕は、少しはその影響を受けたと思いますよ。

課員：あっという間の1時間でした。もっとお話をお伺いしたいのですが、本当に楽しいお話ありがとうございました。先生のお話を通して何うと、人と人の繋がりは大切にしなければいけないなあと思いました。見知らぬ異国で友人がいるというのは、安心感や気持ちの余裕に繋がりますよね。それが、お話しの中にあつた「何とかなつたなあ」ですね(笑)。

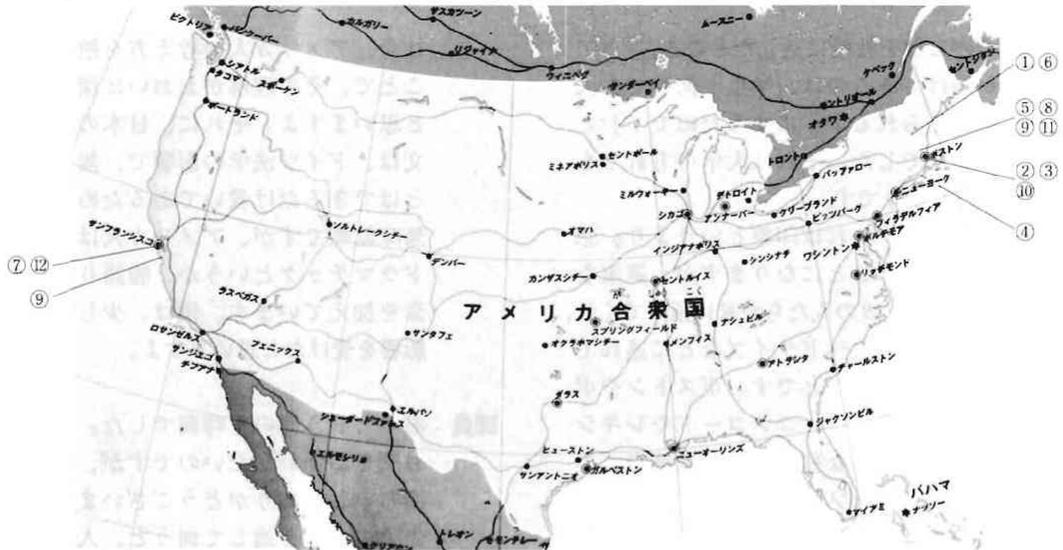
また、先生の行動力にもびっくりしました。ありとあらゆるところへ行かれて、体験してこられている。身をもって経験されたことは忘れませんよね。また、機会があれば、お話をお伺いしたいです。ありがとうございました。

*次項の地図に、留学された当時おとずれた都市に●の印をしています。

また留学先で撮られたお写真の一部を掲載しています。



留学先で訪れたアメリカ合衆国の都市（①～⑫は写真を撮られた場所を示しています。）



① コンコルド橋付近の屯田兵の像
(レキシントン・民兵の像)



② 我が部屋にて



③ ハーバードのメモリアルホール前
(ケンブリッジ・ハーバードヤード)



④ スタンフォード大学
(カリフォルニア州・スタンフォード)



⑤ Salem House of the Seven Gables
(セーラム・七椏風の家・マサチューセッツ州)



⑥ レキシントンの独立戦争跡にある屯田兵の像
(レキシントン・ミニットマン像)



⑦ 金門橋(サンフランシスコ)



⑧ Salem House of the Seven Gables



⑨ ビッグベースンレッドウッド国立公園
(カリフォルニア)



⑩ ロースケールの寮の中庭にて
(ケンブリッジ・ハーバードヤード)



⑪ Salem Howlthone Statue
(セーラム・ホーソーン像)



⑫ フィッシャーマンズワーフ
(サンフランシスコ)